

小児科専門研修プログラム

後期研修 3 年間

大学病院 1 年間

関連施設 2 年間

紀南病院

和歌山労災病院

那賀病院

橋本市民病院

日高総合病院

新宮市立医療センター

阪南病院

泉大津市立病院

各研究グループ

血液、心臓、腎臓、神経、新生児

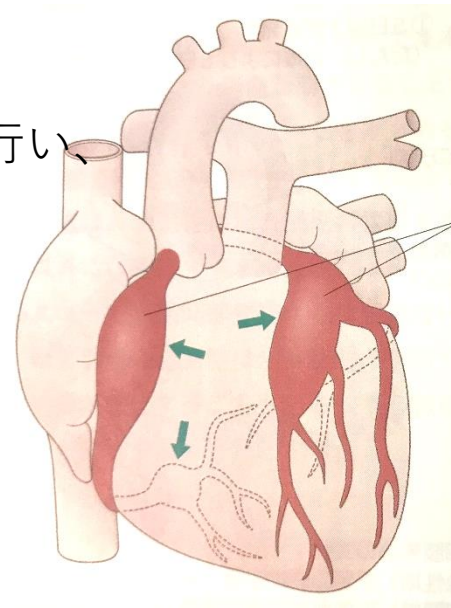
一般小児科医としての就職を支援



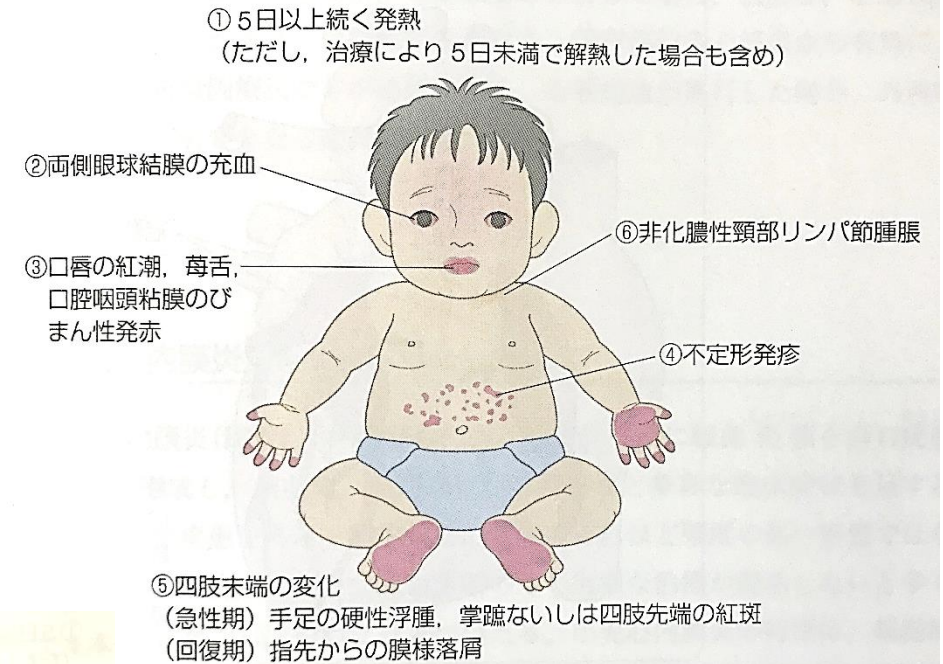
循環器グループ

川崎病の診断と治療

川崎病は発熱や発疹を伴う原因不明の疾患で
日本全国で約15000人、和歌山県内でも毎年100人以上の
子供が罹患しています
合併症として冠動脈瘤を生じる事があります
和歌山医大では川崎病の診断と治療に取り組み、
毎年40人程度の入院治療を行っています
特に初期治療で改善しない難治性川崎病に対して
免疫抑制剤（シクロスポリン）を使用した治療を行い、
成果をあげています
関連病院からの紹介も積極的に受け入れています



冠動脈瘤



循環器グループ

先天性心疾患の診断と治療

生まれつき心臓に病気のある子供は
100人に1人といわれています
その中には生まれてすぐに手術をしなければ
ならない子供や、何回も手術をしなければならない
子供がいます

私たちは心臓エコー検査、造影CT検査、心臓カテーテル検査
などを行い、正確な診断を行っています
そして小児科と心臓血管外科が力を合わせて、先天性心疾患
の子供の手術を行っています
和歌山県内で子供の心臓手術を行う唯一の病院です



小児心臓カテーテル検査

体重増加不良
哺乳障害
多呼吸、陥没呼吸
汗をかきやすい
元気がない
不きげん



a. 新生児・乳児期

易感染性
易疲労感
体重増加不良
発達・発育遅延
チアノーゼ



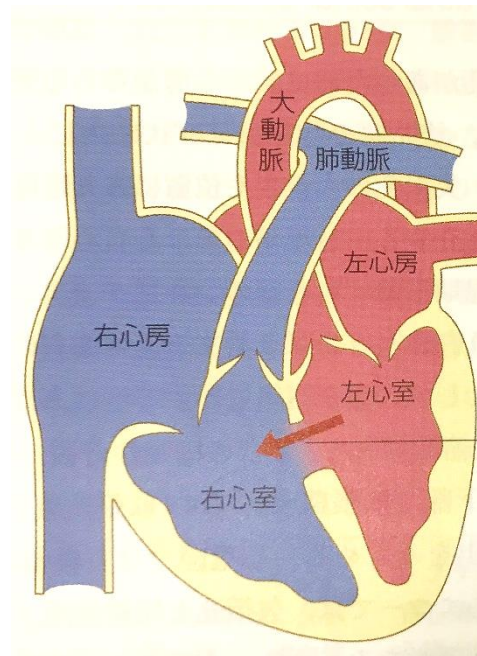
b. 乳幼児期

運動機能低下
動悸
息切れ
顔色不良
胸痛

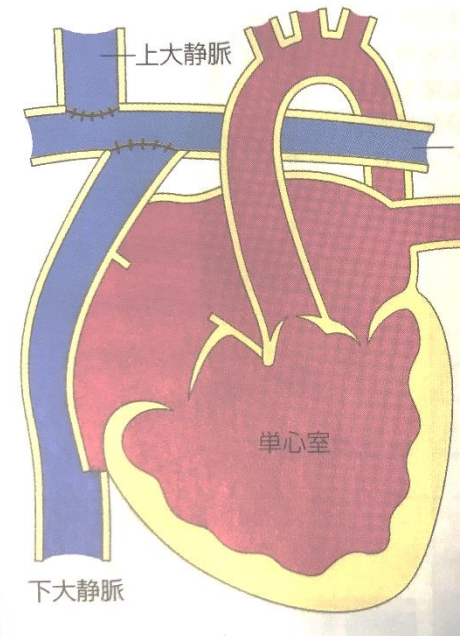


c. 小児期

心室中隔欠損症



単心室症 フォンタン手術後



小児腎生検



長時間脳波検査



小児血液腫瘍グループ

非血縁者間造血幹細胞移植認定診療科

	2010年	2011年	2012年	2013年	2014年	合計
造血器腫瘍（初発）	10	5	8	8	10	41
固形腫瘍（初発）	13	15	17	16	20	81
非腫瘍性血液疾患 （初発）	10	6	8	12	6	42
同種造血幹細胞移植	5	3	0	2	3	13
自家造血幹細胞移植	1	2	3	2	2	10
終末期医療	1	5	2	2	3	13
合計	40	36	38	42	44	200

総合周産期施設（県唯一）としての取り組み

• 遺伝外来,胎児心エコー外来

NIPT(非侵襲的出生前遺伝学的検査)、羊水検査、染色体検査の説明を臨床遺伝専門医が行っている。胎児期から分かる児の疾患(先天性心疾患、消化器疾患、脊髄髄膜瘤など)の精査、説明など専門外来で対応している。

• 外科疾患への対応

小児外科疾患、小児心臓外科疾患、眼科疾患等にも担当医が対応している。体重が1000gに満たない児でも麻酔科医師と協力して外科治療が可能である。

• 新生児搬送の取り組み

新生児専用車(24時間365日)、Drヘリ(昼間のみ)で和歌山県全域からの搬送要請に対応している。**要請後15分程度で出発できる**ように、運転手が常駐している。

• 胎児母体専門医/新生児専門医の養成

日本周産期・新生児医学会が認定する**専門医の養成基幹病院**。現在県内で胎児母体専門医5人、新生児専門医9人が周産期医療の現場で活躍している。

• 長期的なフォローアップ

退院後も就園、就学、その後まで長期的に小児科専門医が外来フォローを行う。小児神経、腎臓、心臓などの専門医もあり適宜相談ができる。臨床心理士による新版K式発達検査、WISC-IV検査を受けることが可能。

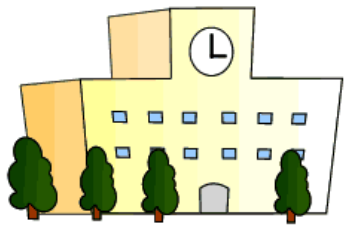
NICU卒業生親子の会

- 年2回(6月,12月)に大学内施設で行っている。
- NICUで知り合った親同士の交流の場、看護師・医師との交流の場となることを目的としている。
- 6月は育児不安や発達に不安がある場合の解消となる様に、訓練士や心理士、発達外来医師との相談の機会を設けている。
- 12月はクリスマス会を兼ねて親子で楽しめる様に、歌やダンス、プレゼントなどの遊びの機会を多く設けている。



小児成育医療支援学講座 (和歌山市、岩出市・紀の川市委託講座)

- ・ 小児成育医療支援室
- ・ 5歳児相談事業



専門研修プログラム（和歌山県立医科大学小児科）

こどもの専門医

こどもの特性、疾患に応じた評価を行い、初期治療ができる
高次医療を含む全身管理ができる
かかりつけ医と地域病院で協力して小児医療を行う

豊かな人間性

小児医療を行うものとしての倫理観
チーム医療のリーダーとなりで他職種と連携できる
患者とその家族の心情を理解し、共感できる

学習者、研究者である

学習、自己啓発を継続できる
学会発表、論文発表を実践できる
臨床研究、治験の意義、目的を理解できる